つて、雜報欄の如きは、殆ど無視せられて了つてゐたが、近年再び雜誌部の名に復つたのである。

第四篇

第一章　補　遺

一　各宮殿下の台臨竝に奉送迎

御台臨の各宮殿下

各宮殿下の御動靜に就いては、具申書の有無、記錄の精粗等の爲に、敍事の統一を缺くのは、甚だ遺憾とする所である。

有栖川宮殿下

有栖川宮殿下

高雄艦長海軍大佐有栖川宮威仁親王殿下には、明治二十五年十一月二十一日、三角より御來熊、縣官憲兵隨行員等と共に御台臨の上、授業の模樣をも御覽あらせられた。邊のことゝて、諸般の準備も屆きかねたが、職員生徒一同、門前に整列して迎送し奉つた。

北白川兩宮殿下

北白川兩宮殿下

北白川第六師團長宮能久親王殿下には、明治二十五年十二月二十九日、文武官民學生等の奉迎裡に御着熊あらせられ、御息所殿下には、同二十六年一月二十八日御來熊、本校生徒は春日驛（現熊本驛）の綠門下に整列して奉迎した。然るに翌二十九日の日曜日に、特に本校生徒御延引の御趣に付、校名を以て、九州日日・九州自由・

熊本の三新聞に、左の如き廣告を出した。

在熊本第五高等中學校生徒諸士ニ告グ

第六師團長能久親王殿下御着熊明二十九日ニ御延引ノ趣ニ付同日午前十一時卅分參校スベシ

かくて師團長宮殿下には、同年四月二十六日午前九時、陸軍中將の御正服に、大勳位を佩びさせられ、安藤少佐外數名の尉官を從へ、御乘馬にて台臨あらせられた。職員一同は、本館玄關前に整列して奉迎、中川校長先導し奉つて、玄關正面の階段を上り、御休憩所に當てたる圖書閲覽室へ御誘引申上げた。殿下には、暫し御休憩の後、高等官に拜謁を賜はるや、再び校長御先導、西の階段を下り、博物標品室等順次教場を御通覽、東方の階段を上り、圖畫教場を始め、階上各教室御通覽、一旦御休息あらせらる。此の日、生徒は、午前八時三十分を以て授業を止め、直に奉迎の準備を爲し、奉迎の後、各〻教室に入りて授業を受け、御巡覽の際は、一同起立敬禮。かくて教室の御巡覽を了らせらるゝや、喇叭の合圖にて、直に武裝を着け、體操場に整列して、殿下を待ち奉る。この間に校長御先導、西方の階段を下り、西の口を經て、事務室入口（今の生徒課・生徒閲覽室の間）より西の口に出でて、體操場に御誘引の上、體操の御觀覽を乞ひ奉る。終りて習學南寮西の口より、自修室御通覽、東の口より北寮に移り、東方の階段を上り、寢室を御通覽、中央の階段を下りて裏に出で、生徒食堂前及び炊事場を經て、物理室・化學室を御通覽、更に柔道道場（今の瑞邦館）に於て、柔道竝に撃劍を御觀覽あり。而して部員には陪觀を許し、その他の生徒は、體操場に在りて奉送の集合喇叭を待ち、合圖と共に集合、校門内に整列す。やがて三たび御休憩所に在らせられたる殿下の御歸館を奉送したのは、正午であつた。

小松宮殿下

有栖川宮熾仁親王殿下の御書

而して宮殿下には、同年七月一日、第二回卒業式にも台臨、親しく御令旨を賜はつたと記されてゐる。（第一篇第三章第五節參看）

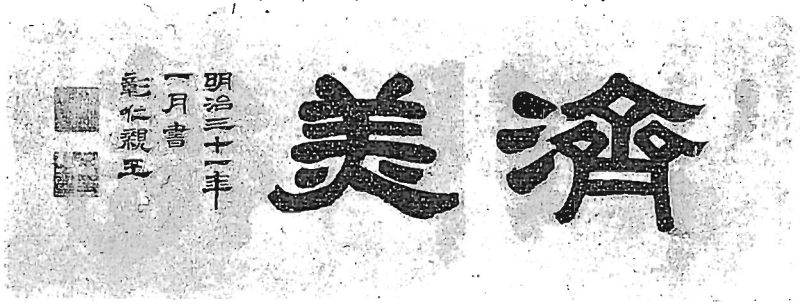
小松宮殿下

小松參謀總長宮彰仁親王殿下には、明治三十年十一月、筑豐の野に於ける師團對抗演習竝に對馬沖繩の海防御覽の後、同月二日午後七時頃御着熊、本校職員生徒一同も亦、春日驛（現熊本驛）にて奉迎した。

かくて殿下には、同月四日午後一時三十分、御宿所偕行社を御出發、中川校長御先導にて、一時五十分、正門より中門の間に整列せる職員生徒の奉迎を受けさせられつゝ御臨校、直に本館階上の御休憩室にて御少憩、高等官諸教授に拜謁を賜はりたる後、本校沿革・職員現在數・生徒級別・年齢・授業料・教室用品料・寄宿生經費豫算・資金物品數地・建物等、最近の調査に係る調書を御覽あり。畢りて東の階段を御降りありて、化學教室・新築建物・博物教室・物理教室御巡覽の後、學寮東口より御入りありて、親しく寮内を御通覽あり。圖畫教室・瑞邦館を經て、本館北の口より御休憩室に還らせられ、友田・田丸二教授撮影の阿蘇噴火口寫眞數葉及び工科生徒の手に成れる圖畫數葉とを御覽に入れたるに、甚だ御意に叶ひて、御携へ遊ばされし由。

御染筆を乞ひ奉りて「濟美」の御額を奉掲す

再度の台臨



小松宮彰仁親王殿下の御書

かくて午後二時三十分、東方より御出門ありて、陸軍墓地に至らせ給ひ、それより水前寺に向はせ給ふ。職員生徒一同は、正門前に整列して見送り奉り、越えて六日午前十一時、熊本御出發の際は、春日驛にて奉送した。

而して校寶の一たる「濟美」の御額は、殿下御台臨の際、中川校長は、高崎別當を介して、御染筆を乞ひ奉り、殿下の御快諾を得たもので、有栖川宮殿下の「瑞邦」と共に、(第三篇第二章第二節參看)龍南會員の修養に資する目的を以て、三十一年六月、瑞邦館に奉掲し、後雨天體操場に、又更に柔劍道道場に移し奉つたもので、今、雨天體操場を舊濟美館と稱する所以である。

小松宮殿下再度の台臨は、それより五年後、即ち、明治三十五年十一月御舉行の陸軍特別大演習御統監のため、行幸あらせられた　明治天皇の御名代として、同月十三日午後一時十分のことである。當日、職員は校門内に、生徒は校門外に於て奉迎、櫻井校長御先導申上げ、假御座の間に入らせられて暫時御休憩、此の間に、本校數地建物の圖面・建物・實驗工場、主要なる機械の寫眞並に本校の現況略記を御一覽に供し奉り、それより教室内に陳列せる圖書・標本・機械及び生徒の成績品を御巡覽。續いて生徒の體操科授業を御覽の上、午後二時五分、一同の奉送裡に御歸途に就かせられた。而して此の日は、清浦司法大臣・寺内陸軍大臣・細川侯爵・藤村男爵・大久保大分縣知事・木下京都帝國大學總長・田代長崎醫學專門學校長其の他在地方高等官等も、招待に應じて來校したが、櫻井校長は、前記の圖面・寫眞及び略記を携へて、大本營に御供申上げ、親しく之を奉呈した。

提灯行列

因みに、翌十四日の夜、本校七百の健兒は、提灯行列を催し、「見よ紫の雲湧きぬ　君が千歳を祝はずや　御聲とほく不知火の　筑紫のはてにいでましぬ」の歌を高唱し、　至尊の萬歳を三呼したる後、小松・久邇兩宮殿下の御旅館に至り、兩殿下の壽を祝し奉り、兩殿下には、いとも御滿足に思召さるゝ由に感激しつゝ歸校した。

殿下の薨去と遙拜

かくの如く、小松宮彰仁親王殿下には、兩度の御台臨あらせられたるを以て、三十六年二月十八日、薨去あらせらるゝや、校を擧げて恐懼哀痛措く所を知らず、同月二十六日、一同體操場に出で、神籬を場の巽に設け、遙かに御柩の豐島が岡に向はせ給ふを拜したのである。

有栖川若宮殿下

有栖川若宮殿下

有栖川若宮殿下には、明治三十七年五月二十五日午後四時四十三分、春日驛御着、明二十六日、第六師團等御巡覽後、赤十字社熊本支部に御立寄りの上、午後二時、台臨遊ばされた。是より先、櫻井校長は、該支部にて御待受け、茲より御先導申上げた。江木熊本縣知事・岡村陸軍少將・飯田旅團長・江橋幼年學校長・德永憲兵隊長・辛島熊本市長等隨從、本校職員並に熊本裁判所高等官・熊本縣立各學校奏任待遇職員は本館玄關前に、本校生徒は校門外に奉迎した。御座の間に入らせられ、暫し御休憩の間に、本校一覽・職員生徒數調等を御覽に供し、次に、奉迎せる高等官並に同待遇一同に拜謁を賜はり、それより生徒の授業及び各教室・機械工場御巡覽の

集合擊劍を御覽に供し奉る

後、本校生徒の柔術劍擊御覽あり、續いて體操場に臨ませらる。本校生徒並に熊本縣立工業學校・同熊本農業學校・同熊本商業學校生徒は、場の周圍に整列し、熊本縣立師範學校・同中學濟々黌・同熊本中學校生徒約一千名の集合擊劍を御覽に供す。終りて再び御座の間に入らせられて御休息、此間に本校舍等の寫眞を御覽に入れ、午後三時二分、奉迎と同じ奉送を受けつゝ御歸途に就かせられた。而して櫻井校長は、御隨行申上げて御旅館に伺候し、曩に御覽に供した書類並に校舍等の寫眞を奉呈したのである。

閑院宮殿下

閑院宮殿下

閑院宮殿下には、明治四十二年三月十日、日本赤十字社熊本支部總會に台臨のため御來熊、同十一日午前九時過、小澤赤十字社副社長・島村陸軍少將・鍋島陸軍少佐・川路熊本縣知事その他を隨へ、熊本市警察署長の先驅にて、本校に台臨あらせられた。職員は中門内に、生徒は本門内に、而して中隊教練に加はるべき生徒は、武裝を爲して體操場に於て、夫々奉迎。松浦校長の御先導にて御座所に入らせられ、御少憩の上、御座所に陳列せる物理器械・動植物鑛物の標本・圖畫の類を台覽あり。それより本校教員一同に拜謁を賜はり、次に各部三年生及び二年生の中隊教練を御覽あらせられ、再び御座所にて御休憩中、本校職員生徒に關する調書並に本校寫眞等を台覽に供す。かくて午前十時過、熊本高等工業學校に向け御出發。職員は先と同じく、生徒は教員指揮の下に、體操場に於て奉送した。而して松浦校長は、後刻御旅館に伺候して御禮を言上し、且、台覽に備へたる調書・體操教員履歷書・寫眞を奉呈した。

奉送迎の各宮殿下

奉送迎の各宮殿下

或は職員生徒一同若くは代表者を以て送迎し奉り、或は御親閲を賜はつた各宮殿下を、年代順に謹記すれば、左の通りである。

皇太子殿下（大正天皇）

皇太子殿下（後の大正天皇）

御微行の皇太子殿下には、明治三十三年十月二十一日、午後三時三十五分御着熊、同月二十三日御發に付、一同春日驛（現熊本驛）に迎送し奉つた。而して當時本校より台覽に供し奉つたものは、太閤征韓の際名護屋城に於ける諸侯陣立の圖一折、同上記錄一冊、切支丹一揆一冊、肥前國原古城趾に於て採拾したる彈丸二個、沖繩風俗取調書一冊、沖繩風俗繪畫一卷（以上、武藤教授が、校命に依り實地に就いて取調べたもの）、阿蘇山噴火口及附近の寫眞二十五葉（以上、友田教授が、校命に依り實地に就いて調査撮影したもの）等で、琉球風俗繪卷を除くの外は、悉く御持歸あらせられたと記してある。

台覽の品々

伏見宮殿下

伏見宮殿下

特別檢閲使陸軍大將貞愛親王殿下には、明治四十四年五月七日、午後四時廿三分熊本驛御着に付、本校全生徒は、細工五丁目に於て奉迎。同廿二日午前九時五十分、鹿兒島へ向け御發の際は、上通三・四丁目に於て奉送した。

閑院宮殿下

閑院宮殿下

大正二年十一月二日、午後四時三十一分熊本驛御着。同七日午後十二時二十分、御發あらせられた。本校生徒は、細工五丁目に於て迎送し奉つた。

朝香宮殿下

朝香宮殿下

大正六年五月二十三日、午後四時三十八分熊本驛御着に付、職員生徒（武裝）一同、夫々所定の場所に於て奉迎。同月二十六日、午前十一時四十五分熊本驛御發に付、前同樣奉送。（但、生徒は正服正帽）

北白川宮殿下

北白川宮成久王殿下

大正六年九月三十日、午前七時三十九分御着熊、十月三日朝まで、大矢野原に御滯在。翌日午前七時三分、熊本驛を御發あらせられた。本校よりは、公務に差支なき職員及び生徒代表各組正副組長、一部一年丙組生徒を以て、迎送し奉つた。

久邇宮殿下

久　邇　宮　殿　下

大正九年五月十六日、午後十二時四十三分熊本驛御着、翌十七日午前八時二十五分御發に付、全校生徒は、新鳥町附近に於て迎送し奉つた。

皇太子殿下（今上陛下）

皇　太　子　殿　下（今上陛下）

大正十年九月三日、海外より御歸朝に付、職員一名に引率せられて、生徒代表二名上京奉迎。本校に於ては、午前九時より、奉祝拜賀式執行。

久邇宮殿下

久　邇　宮　殿　下

大正十二年五月十六日、午後十二時四十三分御着に付、第二時限まで授業の後、新鳥町附近に於て奉迎。翌十七日、午前八時二十五分御發に付、同所に於て奉送の後、第三時限より授業。

秩父宮殿下

秩　父　宮　殿　下

大正十四年二月二十三日、熊本御發、自動車にて阿蘇に向はせらるゝに付、職員生徒一同、正門前に於て奉送した。

閑院宮殿下

閑　院　宮　殿　下

大正十五年三月三十一日、午後五時熊本驛にて奉迎、四月三日早朝、正門前にて奉送。

梨本宮殿下

梨　本　宮　殿　下

昭和十年四月十三日御來熊、翌十四日、城東帶山練兵場に於て御親閲、同十六日御發に付、生徒代表二名奉送。

閑院宮殿下

閑　院　宮　殿　下

昭和十年十月三十一日、午後十二時四十二分御着、翌十一月一日、午後十二時五十一分御發に付、生徒代表二名を以て、迎送し奉つた。

高松宮殿下

高　松　宮　殿　下

昭和十年十一月十四日御來熊、翌十五日午前八時御發、自動車にて阿蘇に向はせらるゝに付、職員生徒一同、正門前に於て奉送。

賀陽宮殿下

賀　陽　宮　殿　下

昭和十年十一月十七日、鹿兒島伊敷練兵場に於て御親閲あらせられた。本校よりは、生徒代表十名並に途中引率者二名參加した。

其他御來

右の外、御來熊の宮殿下を謹記すれば、大正九年十二月七日には閑院・梨本兩宮殿下、昭和五年七月二十六日に

熊の各宮殿下

は秩父宮・同妃兩殿下、昭和六年七月三十日には閑院若宮殿下、昭和七年二月二日には李王垠殿下、同年十月三日には北白川宮永久王殿下、昭和八年四月一日には久邇宮朝融王殿下、同月月八日には梨本元帥宮殿下、同月十日には高松宮妃殿下、昭和九年四月七日には東伏見宮妃殿下、同年五月三十一日には伏見宮博恭王殿下、昭和十年十一月七日には朝香宮孚彦王殿下があり、御動靜の御都合に依り、奉送迎を御遠慮申上げたものと察せられる。

本校と第一高等學校との關係

二　帽章と白線

全國の高等學校中、その沿革の最も古いものは、第一・第三の二高等學校であることは、周知の事實である。中に就いて一高は、大學豫備門時代から數へると、前記の校則に徴しても、文字通りに第一たる資格があることも喋々を要しない。而して明治十九年に創設せられた五高等中學校の帽章が、その形式に於て相通ずるものがあるのは、第一と第五とのそれである。それには何か理由がなければならぬ。

本校設立當時に於て、形式内容ともにその標準となつたのが、第一高等中學校であつたことも既に述べたが、殊に、野村校長が一高の校長であつたことが、その最も深い因緣となつたことも察せられるであらう。これ則ち他の凡ての事が、細大となく相談の結果に成れるに反して、圓に五中の文字を入れることは別として、柏葉と橡欅葉とを組合せることは、殆ど先決的のものであつた所以ではあるまいか。然り而して創立當初は、帽章が何を意味するかに就いて熟知せられてゐた筈なのに、時と共に忘れられて了つたものと見えて、大正三年になつて、本校から第一高等學校宛、その由來を照會した回答が來てゐる。

帽章に關する一高よりの回答

本月四日付ヲ以テ生徒帽章之儀ニ付御照會之趣了承右ハ當校ニ於テモ柏葉及橡欅葉ノ帽章ヲ相用ヒ居リ候而シテ右兩葉ヲ採擇セシ意味ハ別紙之通リニ候間御了知相成度此段及御回答候也

大正三年十二月十四日　　第一高等學校庶務掛回

橡欅ハミネーヴァノ神ノ象徴ニシテ智（文）ヲアラハシ柏ハマルスノ神ノ象徴ニシテ勇（武）ヲアラハセルモノ

要スルニ文武ヲ象レルモノ

而して「緑も深き柏葉の……橡欅の花雫すよ」云々の一高の寮歌は、一と頃感激を以て一般に歌はれ、天下を風靡するの概があつたことも、中年以上の人々の知る所であらう。

帽章及び釦の改正

然るに、明治二十七年九月十一日の掲示には、

今般本校帽章及釦ヲ改正ス

但從來ノ生徒ハ當分ノ内從來ノ釦ヲ其儘用ユルコトハ苦カラズト雖モ帽章ハ速カニ更正スベシ

とあるのは、本校が、同年を以て第五高等學校と改稱せられた爲、圓の文字を五高に改めたことが察せられる。而して現今各高等學校の帽章に文字を入れてゐるのは、蓋し本校のみであらうと思ふ。

白線の一條・二條・三條

白線は、恐らく全國高等學校共通となつてゐると思ふが、本校現在の白線三條に就いては、本科・豫科・補充科と分れてゐた頃は、本科は三條、豫科は二條、補充科は一條と區別されてゐたものが、補充科がなくなり、本科と豫科とは合して大學豫科となつては、條數に區別を設ける謂はれもなくなり、遂に今日の三條だけとなつた